

マッチョ・カルチャーと犯罪被害経験  
JGSS-2001 データによるルーティーン・アクティビティ・セオリーの検証：  
暴行、空き巣、強盗の比較を兼ねて

谷 岡 一 郎  
(大阪商業大学総合経営学部)

Masculinity, Daily Routine, and Crime Victimization:  
A test of Routine Activity Theory by using the JGSS-2001 Data  
Ichiro TANIOKA

Bar-going had strong tie with the victimization of simple assault (Tanioka, 1986). This paper tests the relationship between one's daily routine of which concerned with, so to speak, masculinity (or macho-culture) and criminal victimizations. According to the routine activity theory (Cohen & Felson, 1979), activities come from masculinity would relate to victimizations of assault, but not of burglary (theft) or robbery. The analysis of JGSS-2001 data indicates that the frequency of macho-type activities can predict the assault victimization of female only; not for male. Also, within the macho-type activities, smoking and drinking behavior are the two most significant variables to predict assault victimizations. The reason will be discussed further.

Key words: JGSS, crime victimization, masculinity, routine activity

ルーティーン・アクティビティ・セオリー (Cohen & Felson, 1979) によると、人間の日常生活習慣が犯罪の被害経験と密接な関係を持つ。潜在的に危険な空間・時間を多く通過するものはそれだけ、多くの被害に遭うはずだと考えるのである。

かつて、バー(や類似の店)に行く頻度が、暴行の被害経験と深い相関を持つことがアメリカで示されたことがある(Tanioka, 1986)。バーは潜在的に危険な空間だと考えられるからである。今回はバーの代わりによく似た変数を使用し、日本でも同様であることを確認している。加えて、人々のマッチョ・カルチャーの要素と思われるものを指数化し、暴行、空き巣、強盗の被害経験との関係をルーティーン・アクティビティ・セオリーを軸として検証した。分析の結果、マッチョ・カルチャーの多寡は、特に女性の暴行被害経験をよく説明するが、男性にはあてはまらないことが判明した。また、マッチョ・カルチャーのいくつかの指標の中で、喫煙習慣と飲酒頻度が最も重要な暴行被害の予測変数であった。理由などを含め、多角的に議論する。

キーワード：JGSS、犯罪被害経験、マッチョ・カルチャー、ルーティーン・アクティビティ

## 1. 性別と犯罪

犯罪は男性の専売特許ではない。単に加害者も被害者も、男性のほうが圧倒的に多いというだけのことである。強盗、傷害、暴行といったいわゆる粗暴犯で男性加害者割合は女性の7～8倍。財産犯でも3～4倍に達する<sup>(1)</sup>。被害においても、特に粗暴犯において、男性の比率は女性のそれをはるかに凌駕する<sup>(2)</sup>。

男性のほうがなぜ犯罪者となりやすいのかという原因については、過去にいくつかの研究が存在する。それらは大きく分けて、1) 遺伝的に男性は女性より暴力的傾向が強いとする説(たとえば M.ギグリエリ<2002>, D.モリス<1971>, 高井<2001>)、2) 生物学的に体が大きく、力が強いいため、問題解決の手段として自然に暴力を使うことが多くなることもあるが、主として生育環境が主原因だとする説(Wolfgang, et al.<1972> Felson,R<2002>など)の二つに分類されると思う。最初のグループは100%とはいわないが「先天(生来)説」、もうひとつのものはその逆で「後天(サブ・カルチャー)説」と呼んでおこう。

### 1.1 先天説

最初の先天的な説を主張する学者は、生物学者や自然人類学者に多い見解である。マイケル・ギグリエリ<2002>によると、かのチャールズ・ダーウィンも自然淘汰ならぬ「性淘汰」と称する説明の中で、「なぜ男はかくも暴力的なのか」を説明しているという。その部分を引用する。

ダーウィンは「神の手」の再定義から十数年後、性淘汰と称する特定の自然淘汰を説明することで、なぜ雄と雌はかくも違うのか　そしてなぜ男はかくも暴力的なのか　についての理解を前進させた。この過程は一方の性の中で、その性に属する個体が性的競争相手に勝ちやすくなる特徴を高める。これはどちらの性でも作用し、作用のしかたには二つある。雄の間では、一つは「色男戦略」である。この戦略で勝つ雄は、雌が好む特徴に基づいた容姿のいい「色男」を、雌が交尾相手として選ぶことが多いため、より多くの子孫を残す。もう一つは「力の誇示戦略」で、競争相手の雄を打ち破って子作りから締め出すので、雄が残す子孫の数に差が出る(雌も、種によってどちらかの戦略で競争することがある。しかし雌は「スーパーママ戦略」と呼ばれる三つ目の戦略を使うこともある。これは子どもを産む効率で競争する)本能としての戦争、レイプ、ほとんどの殺しをもたらすのは、マッチョ雄型の性淘汰である。〔M.ギグリエリ<2002>p.24より〕

気をつけるべきは、ダーウィンを含めた生物学者たちの主張がマクロ・レベルの傾向を示すにすぎないという点である。筆者を含めて社会学者は、「先天説」と聞くとほぼ自動的に身構え、無意識に反論しようとする。しかし生物学者の言わんとすることをよく読めば、遺伝子に組み込まれた情報が個々の人間に与えるインパルスを問題にしているのでは

ない。1000人、1万人といったマクロの中での犯罪要因を分析した時に、一番多くを説明できる（逆に言えば他の社会学変数で説明できない）のが、より多くの遺伝情報を子孫に伝えようとする戦略であると考えているのである。そして傍証として、遺伝情報が99%以上一致するオランウータンやサルの変異の行動様式の観察結果を示し、かつ、一部の社会学者が唱える生育環境説は、根拠がないばかりか反証のみが存在すると主張するのである。

先天説を一言で説明するとすれば、「男が暴力的なのは、社会全体（親を含めて）の生育環境によるのではなく、単に遺伝情報による」というものである。ただしどの遺伝子がどのようなメカニズムで粗暴犯に結びつくのかという点では意見が分かれている。

## 1.2 後天説

二番目の後天（サブ・カルチャー）説に移ろう。人間は元来生まれてきたときはほぼ白紙の状態であり、本人の性格、知能、素質などは、その者の生育環境の中で育成された結果がほとんどであるとする見解である。従って暴力犯罪を引き起こすのは社会環境であり、男が暴力的なのは、主としてそのように育てられたからだとする。社会学者や文化人類学者に多い考え方でもともと男女の差は本質的にあまりないと考える。遺伝的な男女差は、あるにしても重要なレベルではないとされる。

社会学者の中には、「政治的に正しい」とされる思い込みを前提として、過激なまでに男女の遺伝的差異を無視しようとするグループがいる。特にフェミニストと呼ばれる社会学者グループにその傾向が強いと、ギグリエリ<前掲 2002>は述べる。生物学者から見れば、人間（ホモ・サピエンス）の行動も遺伝情報によって方向付けられたものが主であって、チンパンジーやオランウータンとなんら質的な差があるわけではない。男性が暴力的で女性がおとなしいことは、それを（陰謀によって）奨励する「社会化(socialization)」のせいなどではなく、主として遺伝的な要因だとする。そしてその中心は、ダーウィンのコメントにもあるように「可能な限り自分の遺伝子を子孫に伝えようとする戦略」、つまり他の競争者（他のオス）を除外しようとする本能なのだとして反論していることは前述したとおりである。

筆者も一部フェミニストによる見解は支持できない。社会学者リチャード・フェルソン<sup>(3)</sup>は、その著書において、ドメスティック・バイオレンスも含め、男性の暴力的犯罪はフェミニズム理論を介さずとも説明しうることを示したが、その根拠は客観的に確固たるものであると思う<sup>(4)</sup>。むしろ筆者は、環境要因全体を否定しているのではない。

フェミニスト・グループ（特に急進的なグループ）による、男性は男性が社会的優位を保つように、もしくは女性を二次的役割に限定するために暴力を手段として使用するという見解には、重大な欠点がある。「ならばなぜ、被害者のほとんどが男性であって女性ではないのか」ということを説明できないのである。その面では「オスがメスを確保するために、他のオスを攻撃するがゆえに男性の被害者が多くなる」とする生物学者のほうが、

理論的に説得力がある。

フェミニズム・グループによる主張のもうひとつの欠点は、歴史上すべての社会、すべての時代において、男性のほうが暴力的であったという、帰納的ではあるが厳然たる事実<sup>(5)</sup>を説明できないことである。いくらなんでも、歴史の初期において一度優位に立った男性が世界中の地域で、すべての時代において、女性を搾取し続けたからだ、といったありそうもない説明は受け入れることはできない。

以上の議論をふまえた上で、本論文が検証しようとするのは、男性どうしがよくけんかをするのは男性が女性より多くの、いわゆる「マッチョ・カルチャー的行動パターン」を持つことによるのだということである。マッチョ・カルチャーの内容や定義は後述するが、本論文ではこのマッチョ・カルチャーが先天的なものであるか、後天的なものであるかという部分にはほとんど立入らない。ただしある可能性（特にメカニズムに関して）には言及することになる。

## 2. 環境犯罪学

社会（犯罪）科学の分野において、1970年代より研究が急速に進展した学問分野に「環境犯罪学」(ecology and crime)<sup>(6)</sup>がある。よく誤解されるのだが環境犯罪学という用語は、ダイオキシンや工場廃液などによって環境を破壊する類の犯罪を意味する言葉にも使用される。そうでなくここでは、ターゲットの多い環境や守られていない（監視されない）環境といった、特定の空間や時間における犯罪が増加する要素を問題とする。よりシチュエーション的な意味での環境である。

ある人間が、遺伝的にであれ社会的にであれ暴力をふるう犯罪を犯す場合、少なくともそこには「加害者」、「被害者」の2条件が最低限必要であり、さらに「この犯罪が起こるのを防ぐ者がいない」という3つめの条件も、同一空間・時間に不可欠となる。このように環境犯罪学においては、すべての犯罪を日常生活習慣の中で起こりうる事象（イベント）として捉え、その実体や対策を考えようとするアプローチをする。

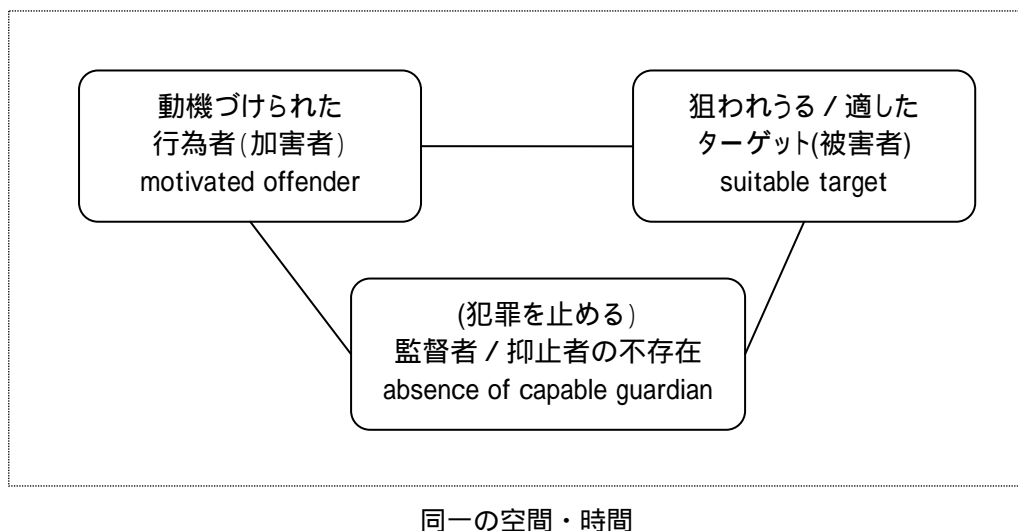
理論的な支柱を与えたのは、コーエンとフェルソン（Cohen & Felson:1979）によるルーティーン・アクティビティ・セオリー（routine activity theory）である。この理論は前述した「被害者のほとんどが男性」である理由をよく説明しうるものであり、今回の研究・分析もこの理論を検証のメイン・フレームにしている。

### 2.1 ルーティーン・アクティビティ・セオリー

ルーティーン・アクティビティ・セオリーとは、ひとことで言えば、「犯罪事象（クリミナル・イベント）が起こりうるのは、『動機づけられた行為者（motivated offender）』『狙われうる（/適した）ターゲット（suitable target）』『（犯罪を）止めうる監視者/抑止者の不在（absence of capable guardian）』の三条件が同一空間内に同時に存在する時で

ある」とする考え方である(図表 - 1 参照)。そのような空間と時間の頻発する地域においては、犯罪は多くなるだろうし、そのような空間・時間を、日常生活において多く通過する人は、それだけ被害者となりやすいということでもある。

図表 - 1 : ルーティーン・アクティビティ・セオリー



重要な点をひとつ指摘しておく、このルーティーン・アクティビティ・セオリーにおいては、「動機づけられた行為者」がなぜ動機づけられたのかということは考えない。遺伝的な理由であれ、社会的な理由であれ、動機づけられていればそれで足りる。逆に言えば、特定社会において、一定パーセントの人間は機会を与えられたらその誘惑に乗るということを前提としている。粗暴犯の場合はカッとして逆上した上での犯罪が多数を占めることもあって、そのメカニズムはもう少し複雑になる(後述する)。

## 2.2 マッチョ・カルチャー

ギグリエリのような生物学者が主張する「力の誇示戦略<sup>マッジョ・ストラテジー</sup>(7)」が犯罪の原因のひとつであることは、過去の研究でも示されている事実である。たとえばウォルフガング他<1972>による有名なライフ・ヒストリーに関する研究では、殺人の動機で一番多かったのが「些細なきっかけ」であったと述べている。ちょっとした口論、悪態などがもとでけんかとなり、最終的に殺人に至ったのである。殺人にまで至らなくとも暴力犯の主要原因も同じことである(M.Gottfredson & M.Hindelang<1981>, M. Hindelang, et al<1978>など)。当論文はマッチョ・カルチャーを持つ者の「日常生活習慣(routine activities)」が暴行行為の被害者(ついでに加害者にも)なりやすいのではないかと、という仮説の検証を目的とする。仮説については後でもう少し詳しく述べるが、マーカス・フェルソンの言う犯罪の起こりうる

危険な空間に滞在する時間が長い人々は、そうでない人々に比べて、そうした犯罪に遭う可能性が高くなるはずだという推論によるものである。その背後に核となるべき行動様式としてのマッチョ・カルチャーがあると考えるのである。

マッチョ・カルチャーの内容や定義はもう少し後で述べるが、マッチョ・カルチャーの多い者ほど酒場へ行き、そこで男らしさの誇示行為として他人と口論したり、けんかをしたりする機会は増えるだろう。その一端としての証拠は少なくとも筆者によって一度示されたことがある (Tanioka<1985>, <1986>) が、この時は単に「バーへ行く」という行為と、暴行の被害との関係に言及されたにすぎず、マッチョ・カルチャーの指標ではなかった。今回はマッチョ・カルチャーをより洗練された形で指標化し、暴行被害との関係を分析することにする。

### 3. モデルと仮説

以上の理由により、マーカス・フェルソンのルーティーン・アクティビティ・セオリーをもとに「マッチョ・カルチャーを多く持つ者が、暴行の被害をより受けやすい」と考える。これが基本の抽象概念としての仮説である。モデル、仮説、それに使用データや分析計画などを順次説明する。

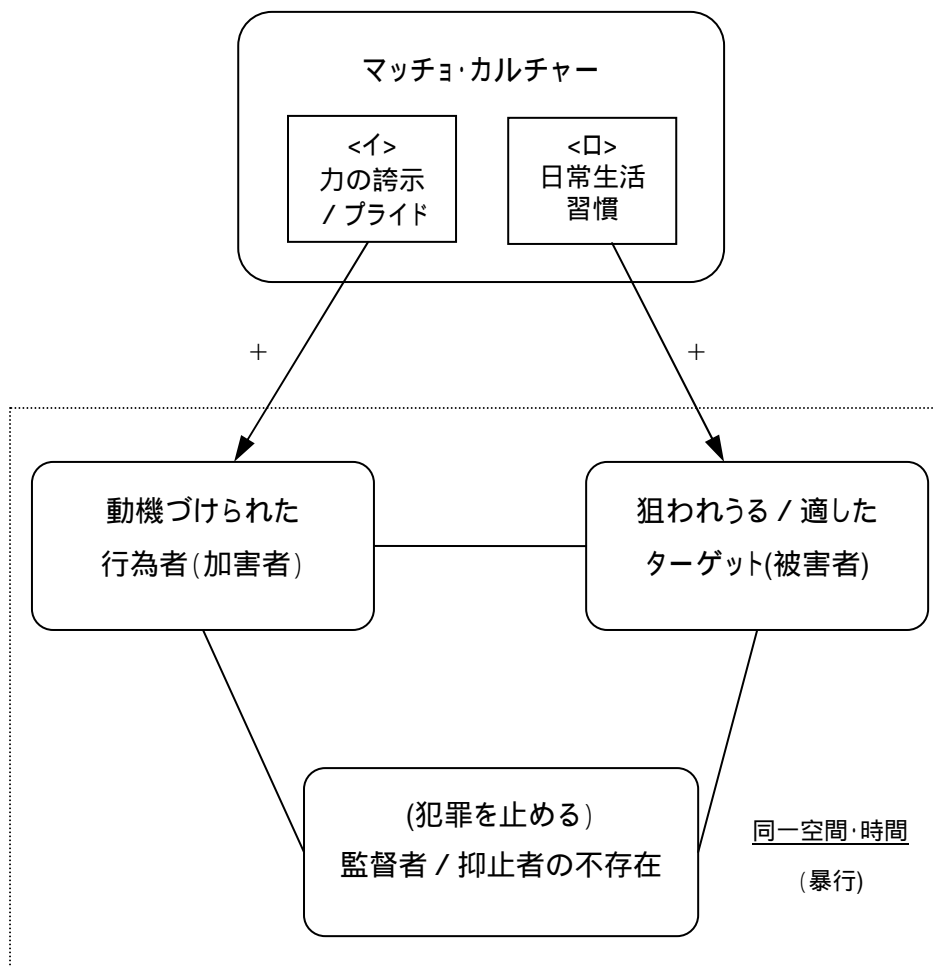
#### 3.1 モデル

マッチョ・カルチャーを持つ者がルーティーン・アクティビティ・セオリーによって潜在的犯罪多発空間に入っていくメカニズムを図示すると、図表 - 2 のようになる。これが今回の検証の基本モデルである。

暴行という限定された犯罪について理解することが目的であるので、ルーティーン・アクティビティ・セオリーの3条件の文言は少し変えてある。前に説明したことだが、図に見られるように、マッチョ・カルチャーが暴行の被害経験を増大させる因果律は2種類 (図中の<イ>と<ロ>) あるだろう。ひとつ (<イ>) はマッチョ・カルチャーによる「力の誇示」的な行動様式や、「プライド」の高さによる口論やけんかの可能性の増大。これはルーティーン・アクティビティ・セオリーにおける「動機づけられた行為者」という要素を増やすことになるだろう。もうひとつ (<ロ>) はマッチョ・カルチャーのうちでも特に酒場へ行く頻度のような日常生活習慣に関する因果律であり、こちらは危険な空間に入る (滞在する) 頻度を増やすがゆえに、「ターゲット」となりやすくさせる効果を持つものと予想される。

このモデル図において言及されていないのは、マッチョ・カルチャーを多く持つ者本人が (生物学者風に言うならより他のオスをやっつけてメスを独占しようとする) 動機づけられた「行為者」となるメカニズム (の可能性) である。これについては当論文の本旨ではないので省いたのだが、本音を言えばその可能性は小さくないと思う。

図表 - 2 : テストモデル / マッチョ・カルチャーとルーティーン・アクティビティ・セオリー



### 3.2 使用するデータ

本研究は東京大学社会科学研究所のデータアーカイブを通じて公表されている「JGSS(Japanese General Social Surveys)」データのうち、2001 年秋の第 2 回本調査 (JGSS-2001) を使用した。このデータは大阪商業大学と東京大学とが共同で企画、実施、そして発信しているもので、1999 年には 2 回の予備調査が行われ、2000 年秋から本調査がスタートしている。今回使用するものは 2 回目の全国規模の本調査である。

このデータの特徴として、変数の数が多いこと (380 以上)、全国的な代表サンプルであること、そしてありがたいことに研究者に対しデータが公開されていることなどが挙げられる。なお JGSS プロジェクトは文部省により「学術フロンティア (卓越した研究拠点に対する補助)」プロジェクトに指定されていることを付記しておきたい。

JGSS-2001 第2回本調査<2001年10、11月>の調査概要
<サンプリング> 層化二段抽出法 (300地点) 4,500人 有効回答数(率): 2790人(62%) 20歳以上(有権者) <データ収集方法> 面接および訪問留置の併用

### 3.3 仮説

実行仮説を説明する前に、抽象概念としての仮説を明記する。

仮説(全体): マッチョ・カルチャーは暴力的犯罪被害の可能性を増大させる
---

それは次の理由による。

仮説(下部) <イ>マッチョ・カルチャーのうちの「力の誇示/プライド」が加害者を作り出す。 <ロ>マッチョ・カルチャーのうちの「日常生活習慣」が被害者を作り出す。
---

男性的文化度(つまり、マッチョ・カルチャーと筆者が呼ぶもの)を数量化する試みは過去に例がある(たとえば、土肥伊都子<1998>, <1999>, S.Bem<1981>など)。重松および谷岡<2000>は、これらをもとに男性的分化を7つの要素に分類した。その7要素を図表-3に示しておく。

図表3: 男性的文化(と女性的文化)

<u>男性的文化</u>	<u>女性的文化(対立概念)</u>
<A> 男性的役割肯定傾向	平等的役割分担傾向
<B> 有形力の行使肯定傾向	暴力否定傾向
<C> VICE 嗜好性	VICE 嫌悪傾向
<D> 性の解放肯定傾向	性の解放否定傾向
<E> 上昇指向	保守的傾向
<F> 危険追求型行動傾向	危険回避型行動傾向
<G> 外向性	内向性

### 3.4 女性的文化

女性的文化(femininity / feminine-culture)について付言しておく、これは決して男性的文化と同次元の量的な概念ではない。男性でも女性でも、両方の文化を多量に持つ者は可能で、これはBem<1974>が「両性具有性(androgyne)」と呼んだ概念である。逆に、両方の文化を持たない人間もありうるし、たとえば男性的文化のみが強い女性もありうる。



さて、このマッチョ・カルチャーの7要素のうち、「力の誇示/プライド」という項目に該当する要素は、<A>の「男性的役割肯定傾向」、<B>の「有形力の行使肯定傾向」、そして<F>の「危険追求型行動傾向」の3つ。「日常生活習慣」に関係ある要素は、<C>の「VICE嗜好性」および<G>の「外向性」である。<D>の「性の開放肯定傾向」は、特に生物学者によるメス獲得指向が強いものと思われるが、明確な指標ではないため、今のところ別の要素（「その他」）としておく。<E>の上昇志向も同じ論によって「その他」の項目に分類する。従って当論文におけるマッチョ・カルチャー指数は、全体としては図表 3の7要素を同じウェイトで加えたものとする。マッチョ・カルチャーはさらに下部の項目、「力の誇示/プライド」、「日常生活習慣」、「その他」の3つに分類され、分析に使用される。

重松・谷岡<2000>は上記7要素を指標化するにあたり、当論文と同じく JGSS データ<sup>(8)</sup>を使用している。幸い重松・谷岡によって使用されたすべての質問項目は JGSS-2001 においてもなされているため、それをそのまま踏襲することにした。

結局、マッチョ・カルチャーの指標(およびその数量)化は図表 4 (次ページ)のようになる。

質問項目の段階が2つ~7つと一定でないため、全体的なマッチョ・カルチャー指数に関しては同等のウェイトとして計算した。つまり下部の7つの項目はそれぞれ同じレンジの満点にそろえることとした。個別的分析、もしくは中間の3項目それぞれが独立した分析においては、このようなレンジを揃える操作は不要である。

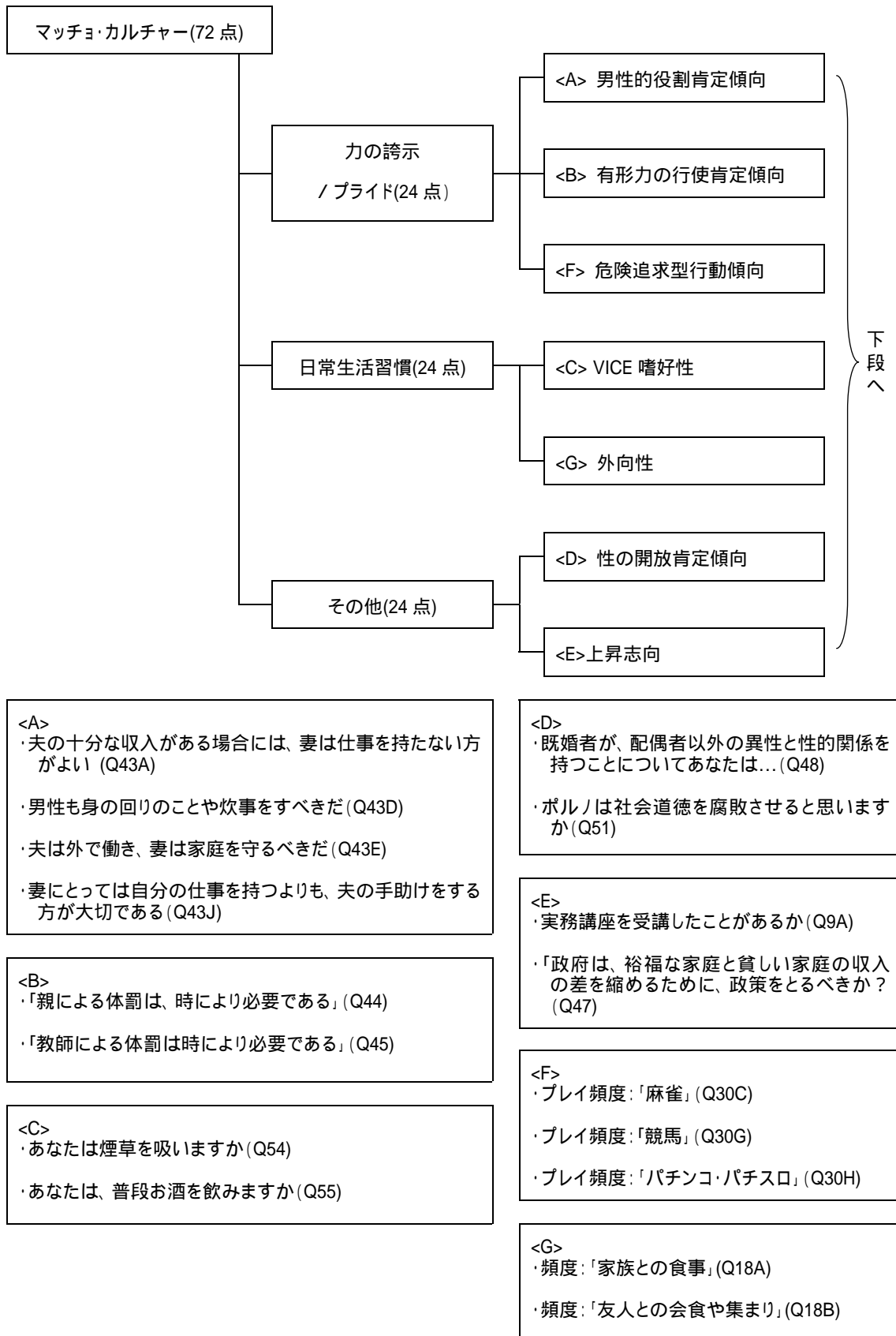
### 3.5 その他の変数

#### 3.5.1. 従属変数

従属変数は一義的には暴行の頻度である。JGSS-2001 では、留置表の Q31 において、「あなたは、殴られたり暴行を受けた経験がありますか」と尋ねている。そして「はい」と回答した人にはさらに付問(1)として、「それは子どもの時ですか、大人になってからですか(回答肢: 1.子どもの時、2.大人になってから、3.両方)」、付問(2)として、「それは誰からですか(回答肢: 1.子どもの時、2.大人になってから、3.両方)」の2問を尋ねている。

このように人生における経験 (prevalence of lifetime) を尋ねる質問においては、子供の頃のけんかやいじめ、もしくは親に殴られたようなケースが含まれる可能性が高いが、それはこの質問の本旨ではない。従って、最初の質問に「はい」と答えた人のうち、「子どもの時」の者は暴行被害の経験がないものとコーディングした。同時に付問(2)において「家族から」と回答したものに関しては、暴行犯罪の被害者とみなさないこととした<sup>(9)</sup>。有効回答者 2790 人のうち、以上の定義による「暴行被害」の経験を持つ者は、男性で 1283 名中 165 名 (12.9%)、女性では 1507 名中 36 名 (2.4%) である。予想どおり、圧倒的に男性が多い。

図表 - 4 : マッチョ・カルチャーの指標と数量



### 3.5.2. コントロール変数

過去の研究により、いくつかの変数が暴行の被害予測に重要であることが判明している。順に列挙する。

「性別」：強姦や一部のワイセツ犯罪を除き、ほとんどすべての粗暴犯および財産犯において、男性は女性より被害者となりやすい<sup>(10)</sup>。暴行被害に関しては、男性は女性の3倍前後である。

「年齢」：NCJISS(National Criminal Justice Information and Statistics Service)によると、「16～19歳」および「20～24歳」の年齢カテゴリーの者が、最も被害率の高いグループである。暴行被害に関して言えば1000人当たり一年間で55人前後。それに対し「50歳以上」のグループは平均して7.5人程度である。ただし今回の従属変数はライフタイムの経験であるので年齢が低いことは、被害が少ない方向に働く可能性がある。

「結婚暦」：結婚すると生活パターンは一定で自由度の少ないものとなり、未婚者や別離者よりも被害者となりにくいことが判明している<sup>(11)</sup>。ただしこれもライフタイムの経験だと、どう変化するのかよくわからない。いずれにせよ、常にコントロールすべき社会的重要な変数である。

「社会階層 教育」：Tanioka<1985>によると、教育レベルは暴行の被害経験に対し、社会学者一般により予測される方向と逆の効果を示す。つまり、教育レベルが高くなるほど、被害確率は高くなるのである。これはある面で生物学者の主張（オスはメスを獲得するために戦う）をサポートする事実でもある。一番美しい<sup>(12)</sup>メスを手に入れる最終的闘争は、学歴の低いグループ間よりも学歴の高い者どうしの方が可能性が高いからである。今回はこの仮説は無視しよう。

「社会階層 職業威信」：これは社会学者の常識どおり、威信が高いほど暴行被害リスクは小さくなる（Tanioka<1985>）。生物学者の側からの理論構成を考えるとすれば、人間は高い地位に登ったあとで結婚するのではなく、結婚してから高い地位につくのが普通である。従って地位はメスの獲得にあまり関係ないということになるだろう。

「社会階層 収入」：収入は暴力犯罪と財産犯罪とで、効果の方向が異なる（Tanioka<1985>）。収入が多いことは、暴行のリスクを下げるが、財産犯の被害確率を上昇させる。まあ違和感のない結論である。

### 3.5.3. 比較対象について

JGSS-2001 で尋ねている犯罪の被害経験の質問は全部で3つあり、暴行以外では「空き巣（1年間）」と「強盗（1年間）」がある。どちらもケースが少ないため、分析には充分とは言えないが、暴行でのモデルが他の2犯罪には無関係であることは、モデルと仮説の当然の帰結である。空き巣および強盗の被害についても分析することとした理由である<sup>(13)</sup>。

ちなみに空き巣の被害経験（過去1年）を持つ者は、男性で45名（3.5%）、女性で60名（4.0%）。強盗の被害経験（過去1年）を持つ者は、男性で15名（1.2%）、女性で12名（0.8%）である。こちらは暴行の被害のような大きな性差は観察されない。

「空き巣」と「強盗被害」の間には、わりと強い相関（ $P<.001$ ）が見られたが、それを唯一の例外として、「暴行」、「空き巣」、「強盗」それぞれの被害経験の間の相関はなかった。

#### 4. 分析結果

##### 4.1. 相関

「暴行」、「空き巣」、「強盗」それぞれの被害経験（従属変数）に対する独立変数（コントロール変数および下部項目・中間項目<(A)~(G)および ~ >を含む）との相関を図表 5 に示す。それぞれ、単独の係数および有意性のみである。

図表 - 5 : 相関係数 / 各種被害経験に対する各変数の強さ (全体)

	暴行	空き巣	強盗
性別 (m-1/f=0)	.202 **	-.012	.019
年齢 (raw)	-.091 **	.045	.017
結婚暦 (1:既 / 2:未)	.002	.036	-.016
就業 (1:就 / 2:無)	.073 **	.012	.019
教育年 (raw)	.012	-.011	-.023
職業威信 (0~3)	.088 **	.034	.022
収入 (年収<万円>)	-.046 *	.004	.033
(A) 男性的役割肯定傾向	-.008	.020	.008
(B) 有形力行使肯定傾向	.038	.015	-.005
(C) VICE 嗜好性	.169 **	-.020	.004
(D) 性の開放肯定傾向	.102 **	.001	-.006
(E) 上昇指向	.027	.023	.020
(F) 危険追求型行動傾向	.138 **	-.015	-.013
(G) 外向性	.039	-.026	.065 **
力の誇示 / プライド (A B F)	.075 **	.014	-.004
日常生活習慣 (C G)	.159 **	-.030	.037
その他 (D E)	.101 **	.013	.006
マッチョ・カルチャー <全体>	.172 **	-.005	.022

: $P<0.075$   
 : $P<0.05$   
 \*: $P<0.01$   
 \*\*: $P<0.001$

正直言ってこれほど明白に差が出るとは考えていなかった。18個もの独立変数のうち、「空き巣」の被害経験と有意な相関（95%レベル）を示したものは「年齢」のみ。「強盗」の被

害経験とでは、マッチョ・カルチャーの要素の1つである「外向性」のみであった。一般にある程度の相関が予想される「性別」、「結婚暦」、「就業」、「教育年」、「職業威信」、「収入」などすべてが無関係（95%レベルで有意でない）であったことは、少なからぬ驚きである。

暴行の被害経験に対しては逆に、ほとんどすべての変数が有意な相関を示している。特にマッチョ・カルチャーに関するものはかなりの高いレベルの有意性を示し、7要素全体を同じウェイトで加えたインデックスとは“0.172”という相関があり、これは性別を除くと最も強いレベルである。

純粋な疑問として、そもそも男女でマッチョ・カルチャーが大幅に異なるはずなので、この違いはマッチョ・カルチャーの効果ではなく、単に性別の効果ではないのかと考えることは自然であろう。そこで相関係数を男女別にチェックしてみる必要がある。図表 6 にその結果を示す。見やすく比較する目的で、今回は有意性のみを図中に示した。

図表 - 6 : 相関テーブル (有意性) / (男女別)

	<男性>			<女性>		
	暴行	空き巣	強盗	暴行	空き巣	強盗
性別 (m-1/f=0)	-	-	-	-	-	-
年齢 (raw)	* (-)			** (-)		
結婚暦 (1:既 / 2:未)		**				
就業 (1:就 / 2:無)						
教育年 (raw)						
職業威信 (0~3)					*	
収入 (年収<万円>)	* (-)					
(A) 男性的役割肯定傾向						
(B) 有形力行使肯定傾向						
(C) VICE 嗜好性				**		
(D) 性の開放肯定傾向				**		
(E) 上昇指向						
(F) 危険追求型行動傾向						
(G) 外向性						*
力の誇示 / プライド (A B F)				**		
日常生活習慣 (C G)				**		
その他 (D E)				**		
マッチョ・カルチャー <全体>				**		

:P<0.075  
 :P<0.05  
 \*:P<0.01  
 \*\*:P<0.001

性別を分けることでいくつかの点が明白となっている。

まず、マッチョ・カルチャーの強弱は男女それぞれに関係があるものの、どちらかと言えば女性の中でマッチョ・カルチャーを多く持つ者と、そうでない者との差が大きい。ただし男女とも「力の誇示/プライド」の要素よりも「日常生活習慣」や「その他」の効果によるものがより強い相関を示している。

男女に分けることで、コントロール変数のいくつかの有意性が復活(?)した。「年齢」は男性の空き巣被害に対しプラスに、そして暴行被害に対してはマイナス(年齢が上がると被害減)に働いている。

「結婚暦」は、男性の空き巣被害に限定してプラス方向の効果を持つ。このあたりのロジックはよく判らない。女性の空き巣被害に限定すれば、「就業している人」でしかも「地位が高い」ほど経験が多い。これはなんとなく理解できる結果である。

「収入」は男性の暴行被害と強盗被害に関係があった。両者は別の方向の関係で、暴行に関しては収入が少ないほど、強盗に関しては収入が多いほど被害に遭いやすいということである。この結果は前述の Tanioka<1985>の結果と矛盾していない<sup>(14)</sup>。

#### 4.2. 多変量(回帰)分析

空き巣被害と強盗被害の分析はこれ以上は無意味であろう。以後は暴行被害経験を従属変数とする重回帰分析を行う。この従属変数は10%前後しか起こらない二項分布なので、ロジット重回帰分析が適切である<sup>(15)</sup>。

##### 4.2.1. マッチョ・カルチャー<全体>

男女合わせた2,790名、男性のみ1,283名、女性のみ1,507名、それぞれの暴行被害経験を従属変数とするロジスティック(logit-model)重回帰分析の結果を図表-7に示す。

図表-7: 重回帰(logit-model)分析/マッチョ・カルチャー<全体・男性・女性>

	<Wald Chi-Sq. Value>			
	全体	男性	女性	
Intercept	13.20 **	2.69	0.35	
性別	52.37 **	-	-	
年齢	20.23 **	4.02	20.53 **	
結婚暦(ダミー)	4.51	0.37	3.38	
就業(ダミー)	0.83	0.05	0.93	
教育年数(estd.)	1.73	0.12	4.77	
職業威信(0-3)	0.33	0.21	0.16	
年収(万円)	10.33 *	9.94 *	0.89	:P<0.075
マッチョ・カルチャー	11.12 **	2.37	17.90 **	:P<0.05
	2790 人	1283 人	1507 人	*:P<0.01
				** :P<0.001

この結果、他のいくつかの変数をコントロールした状態において、マッチョ・カルチャーは性別、年齢(低いほど被害が多い)に次ぐ暴行被害の予測変数であることが見てとれる。95%レベルで有意性を示した残りの変数は、年収(低いほど被害が多い)と結婚暦(既婚者のほうが被害が多い)の2つであった。

年齢が若いほど被害が多いという事実は、被害質問項目が人生における経験(prevalence rate)であることを考慮すると、予想とは逆の方向である。可能性として、1)近年の(若者どうしの)暴行は昔より増大しているため若年層の方が被害経験が多い、もしくは、2)思い出せる経験が限定されるため、高年齢層の被害申告が少なくなる(memory effect)の2つが考えられる。これら以外にもあるかもしれない。

さて、マッチョ・カルチャーが、暴行被害に対する高い予測変数であることはそのとおりとして、(ここからが重要な点であるが)その効果は「ほとんど女性に対するもの」であることが、同じく(図表 7より)観察される。つまり、男性においてマッチョ・カルチャーのある者となない者には、あまり差はないが、女性においてマッチョ・カルチャーの多い者は、少ないものに比べて暴行被害に遭いやすいということである。図表 - 7のマッチョ・カルチャーを、その3つの基本仮説要素「力の誇示/プライド」、「日常生活習慣」、「その他」に分けて同様に重回帰(logit-model)分析をしてみると、この中で重要なのは「日常生活習慣」のみであることが判明する。ここにおいて、当初の仮説のひとつであった男性にとっての「力の誇示/プライド」戦略が暴力行為を行い、同時に被害も受ける原因であったとする考え方は、間違いであったことを認めなくてはならない。

それではなぜ、女性においてのみマッチョ・カルチャーが暴行被害の重要な予測変数なのだろうか。それを調べるため、マッチョ・カルチャーを7つの要素に分解した上で、さらに重回帰分析を行うことにした。7要素の相互の強さと、方向性を観察するため、今回はロジスティック重回帰式ではなく、OLSの重回帰分析とする<sup>(16)</sup>。

#### 4.2.2. 7要素の強さ

図表 - 8が、重回帰(OLS)分析の結果である。

今回使用したマッチョ・カルチャーの7要素のうち、95%レベルで有意性を示したものは、「<C>VICE 嗜好性」と「<B>有形力の行使肯定傾向」のみであり、しかもそれは女性に限定しての話である。

それにしても女性における「<C>VICE 嗜好性」の強さは圧倒的で、年齢を超える単独で最大の予測変数ですらある。この要素には、「酒を飲む頻度」と「喫煙習慣(ダミー)」の2項目が含まれるため、残り5要素をコントロールした上で、この2項目の強さを更に調べてみる必要がある。その結果(必要部分のみ)を図表 - 9に示す。

結論としては、女性にとってどちらも重要な変数であるが、特に「喫煙習慣」の強さは群を抜く。男性については、どちらも無関係に近い。

図表 - 8 : 重回帰 (OLS) 分析 / 7 要素<男性・女性>

		<t-value>	
		男性	女性
	Intercept	2.28	2.71
	年齢	-1.32	-4.17 **
	結婚暦(ダミー)	0.95	0.43
	就業(ダミー)	0.14	-2.16
	教育年数(estd.)	-0.58	-1.89
	職業威信(0-3)	0.29	0.55
	年収(万円)	-3.12 *	-1.08
「7要素」	(A) 男性的役割肯定傾向	-0.21	0.95
	(B) 有形力行使肯定傾向	-0.97	2.06
	(C) VICE 嗜好性	0.23	7.30 **
	(D) 性の開放肯定傾向	0.78	1.19
	(E) 上昇指向	0.80	-0.24
	(F) 危険追求型行動傾向	1.69	-0.99
	(G) 外向性	1.69	-0.76
		1283 人	1507 人

:P<0.075  
:P<0.05  
\*:P<0.01  
\*\*:P<0.001

図表 - 9 : 暴行被害予測変数としての飲酒と喫煙 / 重回帰 (OLS) 分析

		<t-value>	
		男性	女性
	飲酒頻度(5段階)	-1.08	2.97 *
	喫煙習慣(ダミー)	1.35	6.16 **
	(残り11変数:略)	-	-

\*:P<0.01  
\*\*:P<0.001

仮説段階において、男性も女性も日常生活習慣において、いわゆる VICE (悪癖) を多く持つ者は、それだけ潜在的に危険な空間・時間に滞在する可能性が高いこと。そしてそれによって暴行の被害に遭いやすくなるのではないかという仮説のもとに検証を行ってきた。その結果、女性にはそのとおりであったが、男性にはあてはまらなかった。

仮説はまだ肯定も否定もなしえない。ひとつには男性にあてはまらない理由が説明されないことであるが、もうひとつとして、女性のみにあてはまる理由も他に考えるからである。今回判明した、「よく殴られる」女性のステレオ・タイプは、図表 - 10 に示されるように、結婚している無職の(つまり専業主婦の)女性で、年齢は若く教育年数は少なめの方が暴行被害が増える。そしてさらに(図表 - 8 からわかるように)、タバコを喫い、酒を



よく飲み、親や教師が躰のために子供を叩くことを肯定する傾向のある女性が、そうでない者に比べてよく殴られる。ここにおいて、単に日常生活習慣を超えた、なんらかの挑戦的な性格が浮かび上がるのではなからうか。すなわち、日常生活習慣だけでなく、その他の面でも「マッチョ」なのかもしれない。

図表 - 10: 重回帰(OLS)分析 / 中間仮説3項目 <女性>

	<t-value>	
	女性	
Intercept	2.83	*
年齢	-4.83	**
結婚暦(ダミー)	1.89	
就業(ダミー)	-2.04	
教育年数(estd.)	-2.79	*
職業威信(0-3)	0.64	
年収(万円)	-1.12	
力の誇示 / プライド	1.98	:P<0.075
日常生活習慣	5.27	**
その他	1.12	

:P<0.05  
 \* :P<0.01  
 \*\* :P<0.001

男性はマッチョであることが珍しくもなんともなく、マッチョでない(つまりマッチョ・カルチャーの少ない)男性の方が例外だと考えるなら、多くの事実や今回の分析結果が理解できる。つまり、そもそも男性の方が、暴行の加害も被害も圧倒的に多いという厳然たる事実。マッチョ・カルチャーの多寡が女性にのみ重要であったという事実。これらはマッチョ・カルチャーが、男性にはあたりまえすぎて役に立たないが、女性には際立って重要なものであるという考え方を裏付けるものである。

## 5. 結び

今回の分析でいくつかのことが判明、もしくはある程度まで検証された。それらをもう一度わかりやすく箇条書きでまとめてみることにしよう。

マッチョ・カルチャーは「暴行」の被害経験の予測には重要な変数だが、「空き巣」や「強盗」の被害には無関係であるとの予想は、完全にそのとおりであった。

マッチョ・カルチャーは暴行被害経験において、女性にとってのみ重要な変数である。その理由は推測段階にすぎないが、男性にとってマッチョ・カルチャーがあることは、ごくあたりまえのことだからだと考えうる。

マッチョ・カルチャーのうち、特に重要であったのは、飲酒や喫煙の習慣であった。「有形力の行使肯定傾向」がそれに続く。

「力の誇示 / プライド」は、予想に反して暴行被害予測にとって重要な変数ではなかった。生物学者の遺伝子に関する理論にも、一定の限界があるようだ。

暴行に限って言えば、ルーティーン・アクティビティ・セオリーは、分析のための有力な理論である。ただしそのメカニズムはもう少し精査する必要がある。

犯罪の被害者特性の研究は、1970年代に活発になり、その後80年代90年代には忘れられた領域の観があった。21世紀に入り、この価値観の多様化した他文化共生社会にいる現在こそ、犯罪被害者特性の研究がなされるべきだと思う。この論文はまだスタート台にいる状態だが、次のステップへのヒントになるものと考えている。

[注]

- (1) いずれも日本の警察による公式統計(認知件数)をもとにした数字である。アメリカでもたとえば、強盗殺人の逮捕者の90%が男性、カナダでは96%である。
- (2) たとえば、アメリカ・カナダにおける強盗殺人の被害者の80%は男性である。
- (3) どうでもよいことだが、このリチャード・フェルソンは、のちに登場するマーカス・フェルソンの弟にあたる。
- (4) 2002年11月14日、シカゴにおけるアメリカ犯罪学会(ASC)において、リチャード・フェルソンの著作<2000>はフェミニストたちから集中砲火を浴びせられた。しかしリチャード・フェルソンは感情に対し理性で対応し続け、(私の見るところ「ノックアウト」とは言わないが)判定勝ちだったと思う。
- (5) 伝説の「アマゾネス軍団」だとか、根拠のはっきりしない話は無視する。
- (6) 呼び名はいろいろある。もともとはOscar Newman<1972>による著作と、C. Ray Jeffery<1971>によるコンセプトとが始祖とされる。
- (7) 社会科学の分野では「男性的文化(masculinity / macho-culture)」という名称が一般的である。本稿では以後「マッチョ・カルチャー」と呼ぶことにする。
- (8) JGSS-1999 データ(有効回答数790人)を使用している。ただし7要素のうち<F>の「危険追求型行動傾向」は、従属変数であった。また<G>の「外向性」は今回のために加えられた。
- (9) DV(ドメスティック・バイオレンス)は通常「家族から」受ける暴行である。これを加えることは本来なら必要であるが、今回の分析に関しては省略した。DVの加害はマッチョであるほど減少するはずで、当論文の仮説と逆方向の効果を持つと考えられるからである。
- (10) コントロール変数における記述は、(特に注記のない限り)ほとんどすべてBureau of Justice Statistics(前掲)の年次報告書に準拠する。
- (11) Gottfredson <1984:前掲>を参照のこと。
- (12) 何をもって「美しい」と感ずるか、という点にはいろいろな議論があるが、ここでは触れないでおく。「優れた子孫を残しうる」とした方が良いかもしれない。

- (13)具体的な質問は次のとおり。「過去1年間に、あなたの家は空き巣に入れられたことがありますか」そして「過去一年間に、力づくで物品を奪い取られたこと(例えば、強盗、恐喝やひったくり)がありますか」。この2つは暴行被害経験(lifetime)とは異なって「1年間」であることに注意されたい。
- (14)強盗を財産犯と見るなら一致しているが、強盗は財産犯と粗暴犯の両者の特徴を持っているため、「矛盾していない」という表現に留めた。
- (15)通常、従属変数がダミー変数であり、しかもその起こる(起こらない)確率が30%に満たないものは、ロジット・リニア分析の方が有意性の検定に適しているとされる。有意性が落ちることを気にしないなら、OLSでもよい。
- (16)念のためロジスティック、OLSとも試行したところ、両者に特に問題となる差異は観察されなかったことを付け加えておく。

#### [参考文献]

- ギグリエリ, マイケル 1P.(松浦俊輔・訳), 2002, 『男はなぜ暴力をふるうのか』, 朝日新聞社. [Ghiglieri, M.P., "The Dark Side of Man Tracing the Origins of Male Violence," Perseus Books Publishing, 1999].
- 重松洋司・谷岡一郎, 2000, 「男性的文化(マッチョ・カルチャー)と麻雀 特に囲碁および宝くじとの比較研究を中心として」, Gambling&Gaming, 大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要, 麻雀研究特集号, pp.15-35.
- 高井高盛, 2001, 『なぜ男は暴力をふるうのか』洋泉社.
- 土肥伊都子, 1998, 「男性性・女性性の規定モデルの実証的検討」IBU 四天王寺国際仏教大学紀要, 30号.
- 土肥伊都子, 1999, 『ジェンダーに関する自己概念の研究 男性性・女性性の規定因とその機能』, 多賀出版.
- ミード, マーガレット, 1961, 『男性と女性』, 東京創元社.
- モリス・デズモンド(日高敏隆 訳), 1971, 『裸のサル』河出書房.
- Bem, Sandra L., 1974, "The measurement of psychological androgyny," Journal of Consulting and Clinical Psychology, vol.42.
- Bem, Sandra L., 1981, Gender schema theory: A cognitive account of sex typing, Psychological Review, vol.88.
- Bureau of Justice Statistics <各年>, "Criminal Victimization in the U.S.," Department of Justice; Washington, D.C.
- Cohen, L.E. and Felson M., 1979, Social Change and Crime Rate Trends: A Routine Activity Approach, American Sociological Review, vol.44, (Aug. 1979)

- Felson, Marcus, 1982, Ecology of Crime, in Encyclopedia of Crime and Justice
- Felson, Richard, 2002, "Gender and Violence," (Paper presented at ASC-2002 meeting)
- Gottfredson, M. R. and Hindelang M.J., 1981, Sociological Aspects of Victimization, Annual Review of Sociology, vol.7.
- Gottfredson, M. R., 1984, "Victim of Crime: the dimensions of risk," Her Majesty's Stationary Office; London.
- Hindelang, M.J., Gottfredson, M.R., and Garofalo, J., 1978, "Victims of Personal Crime: An Empirical Foundation For A Theory of Personal Victimization," Cambridge, MA.
- Jeffery, C.R., 1971, "Crime prevention through environmental design," Sage Publications, CA.
- Newman, Oscar, 1972, "Defensible space: Crime prevention through urban design", Macmillan, NY.
- TANIOKA, Ichiro, 1985, "The Risk of Assault Victimization: A Routine Activity Approach", unpublished manuscript: Empirical Paper at University of Southern California, Graduate School of Social Science.
- TANIOKA, Ichiro, 1986, Evidence Links Smoking to Violent Crime Victimization, Sociology and Social Research, vol.71. No.1 (October).
- Wolfgang, Melvin, E., Figlio, R., and Sellin, T., 1972, "Delinquency in a Birth Cohort," Chicago University Press, IL.